

## 設立50周年特集 (第3回) 市民参加型調査の取組と今後

### はじめに

文 木村 進(編集委員会)

50周年特集の第3弾は「市民参加型調査」である。協会では市民が身近な自然環境の現状を把握する調査活動に取り組んできた。今回はそれらのうち、主なものについて取り上げたい。その意義としては次の4点があげられる。①参加した市民が自然に関心を向けるきっかけとなる。②身近な自然を毎日見ている市民こそ変化にいち早く気付ける。③調査した市民がその生き物に愛着がわき守りたい意識が高まる。④多くの市民の参加で専門家では得られないデータを収集でき、参加者で問題意識を共有できる(市民科学としての成果)。

協会では自治体等からの委託による調査も多数行っているが、それらについては次号でとりあげたい。

#### 協会設立前の市民参加型調査

協会設立前の主な活動としては、前身の「自然を返せ! 関西自然連合(以下、自然連合と略)」による2つの調査をあげることができる(「酒井健1975」を参考にまとめた)。1つは1973年実施の「土地利用形態からみた大阪府下自然環境メッシュ図」の作成で、自然連合に参加する関西の18団体の延べ500人のメンバーが地図を片手に大阪府内を歩き回り、自然度を9段階で判断してまとめ上げたもので、1974年に「よみがえれ! 大阪の自然第一集」とし

て刊行されている。この調査は当時進められていた大阪府の自然環境保全条例に基づく地域指定に対して、府側の一方的な資料によるのではなく、市民の手で基礎資料を作成して、積極的に要望を出しているなどの目的で行われた。そして、2つ目は1974~75年に実施されたタンポポ調査で、これについては、次ページで詳しく取り上げる。

#### 大阪自然環境保全協会の調査活動

1976年に社団法人として大阪自然環境保全協会が設立され、その後もタンポポ調査は5年毎に継続されている。1980年にはヒバリの生息調査と合わせてタンポポ調査(第2回)が行われ、両種の調査結果を関連づけて考察された。その後の調査はミニ年表にまとめたが、この中の6つの調査はこの後、各担当者から報告があるので、他の2つの調

査活動について簡単に紹介しておきたい。2012年から当協会の自然保護調査研究部で取組んだ「里山指標生物調査」は里山を代表する100種の動植物を年2~3回季節を変えて調査し、里山の現状を診断しようとするもので、2014~2016年度の3年間に大阪の40地域の里山から延べ200件のデータが集まった。今後も同じ調査を実施して里山環境の変遷を把握したい。また、2025年に関西万博が開催された夢洲は大阪府の生物多様性ホットスポットの1つに指定されているが、港湾局の許可を得て、2019年から鳥類を中心に月1回程度の調査を継続し、蓄積した独自データで大阪港湾局の環境アセスメントの問題点を指摘することができた。この他にも各地域で多様な調査活動が行われ、地域の自然の保全に活用されている。

表 主な市民参加型調査ミニ年表

★:現在も継続中

1973	大阪府下自然環境現状調査(自然破壊度メッシュ地図作成)
1974-75	★第1回タンポポ調査実施(2024-25 第11回調査)
1977	大阪府下の野生動物生息実態調査開始
1979-80	第2回タンポポ調査、及び、ヒバリ生息調査実施
1982	★第1回里山動植物調査実施(12回から里山一斉調査)
1997	堺市自然環境基礎調査業務を受託(市民参加調査も含む)
2001	★野生シカ調査会発足
2005	タンポポ調査近畿2005実施
2005	★モニタリング1000里地調査(コアサイト穂谷)開始
2010	タンポポ調査西日本実施(2015・20・25年も継続)
2010	★里山指標生物調査開始(~試行、2014-16:第1回集約)
2015	★サシバ生息状況調査開始(サシバプロジェクトin大阪)
2017	大阪府内カヤネズミ一斉調査(草生地生態系研究会:2013発足)

# タンポポ調査50年の経緯と成果

文・図 木村 進(タンポポ調査西日本実行委員会事務局長)

## 第1回タンポポ調査について

大阪における第1回タンポポ調査は、1970年結成の「自然を返せ！関西市民連合」によって1974～1975年に行われた。この前年に作成した「大阪府下自然環境メッシュ地図」で自然破壊地域の広がりにはわかったが、残された緑地も質的には差があり、その違いまで明らかにすることを目的にタンポポ調査が企画された。この調査は堀田満さん(京都大学)の指導で、市民にタンポポの頭花を1本採取し、住所記録とともに送ってもらい、学生が中心の11人のメンバーが貼り合わせた50,000分の1地形図にプロットして集約した。結果を私と四井清隆さんが解析し、和文タイプで打った報告書を1975年10月に発行した。この月に近畿大学であった日本植物学会の小集会や会場展示で報告したところ、学会参加の植物学者にも好評で、初日で報告書が売り切れ、その日の夜に事務所で増刷して翌日の会場に持ち込んだほどであった。私たちが初めて府県規模で行ったタンポポ調査は、その後、環境庁も全国規模で実施し、小中高校の理科の教科書にも掲載されるなど、全国に広まった。また、マスコミによる報道もあって、大阪における自然破壊の現状を市民に訴える点で大きな成果があった。

## その後のタンポポ調査の発展

協会設立後もタンポポ調査は5年毎に継続され、結果については本誌特集(4-7ページ)や調査報告書を参照してほしいが、この間の経

緯を下表にまとめた。第1～2回調査では見分け方がわからない人が多く、頭花を送ってもらったが、3回～6回は調査票に書いた識別法を見て調査者に判定していただいた(わからない場合のみ花を送付)。また、学校等の団体は結果を地図にプロットして送ることも可とした。その結果、報告件数は急増し、2000年には29,628点に達した。これは、市民の環境への関心の高まりによるとともに、環境教育の重要性が叫ばれ始めた時期で、何をすればよいかわからなかった教員のニーズに合ったためで、教員向け説明会を市岡中理科室で計画したところ、多数の教員が集まり急遽会場を講堂に移したほどであった。ただ、この方法だとタンポポの種類を間違えて報告した場合のチェックを十分にすることができず、結果の信憑性が問われることとなり、7回目からは花の添付を必須とした。この他、生育地の土壌や混

生植物を調べる生育環境調査(本誌特集参照)や、地図上の定点で詳細に環境と種類を調べる定点調査も行った。

## タンポポ調査の新たな展開

1988年にタンポポの雑種の形成が確認され、1997年には大阪でも外来種としてきたタンポポの多くが雑種であることが判明し、タンポポ調査は新しい展開をみせる。雑種は形態だけでは判別できず、DNA解析をしないと識別できないことから、検定でも意見がついて教科書への掲載が難しくなった。私たちも雑種問題を避けて調査を進めることができなくなり、1998年にタンポポ研究者にアンケートを送り、2003年には3人の研究者を大阪に招いて研究集会を行い、布谷知夫さん(滋賀県立琵琶湖博物館)や鈴木武さん(兵庫県立人と自然の博物館)と大阪の私たちとで検討を進めた。その後、伊東明さん(大阪市大)

表 大阪におけるタンポポ調査50年間の経緯

回	年度	地点数	外来種率	主催団体	調査方法	追加地点	
						環境	メッシュ
1	1975	2,186	36.2	"自然を返せ！ 関西市民連合"	サンプル送付	○	2km×2km
2	1980	1,823	50.0	(社)大阪自然環境 保全協会	サンプル送付		2km×2km
3	1985	9,284	49.2	(社)大阪自然環境 保全協会	調査票+サンプル	○	"三次メッシュ" (日本測地系)
4	1990	7,270	56.9	(社)大阪自然環境 保全協会	調査票+地図		"三次メッシュ" (日本測地系)
5	1995	11,611	60.8	(社)大阪自然環境 保全協会	調査票+地図		"三次メッシュ" (日本測地系)
6	2000	29,637	63.0	(社)大阪自然環境 保全協会	調査票+地図	○	"三次メッシュ" (日本測地系)
7	2005	6,916	70.1	タンポポ調査 近畿実行委員会	サンプル+調査票		"三次メッシュ" (世界測地系)
8	2010	6,507	68.7	タンポポ調査 西日本実行委員会	サンプル+調査票		"三次メッシュ" (世界測地系)
9	2015	8,131	64.7	タンポポ調査 西日本実行委員会	サンプル+調査票		"三次メッシュ" (世界測地系)
10	2020	13,131	59.3	タンポポ調査 西日本実行委員会	サンプル+調査票		"三次メッシュ" (世界測地系)
11	2025	13,651	64.6	タンポポ調査 西日本実行委員会	サンプル+調査票	○	"三次メッシュ" (世界測地系)

に雑種のDNA解析を引き受けていただき、2004-05年には近畿全域で雑種の存在も考慮し、総苞外片が上向きの雑種をカンサイタンポポなどの在来種と確実に区別するために、花粉の顕微鏡観察で確認する方式を導入した。これは在来種の多くは2倍体で花粉が均一で、サイズがバラバラの雑種や外来種と区別できるためである。その後の調査では添付された頭花の花粉観察をし、雑種のDNA解析のためにあれば瘦果も貼付をお願いしている。この方式を導入したタンポポ調査近畿2005は、雑種問題もクリアした画期的なタンポポ調査としてまさに市民科学の成功例となった。近隣の県からもいっしょに調査をしたいという申し出があり、2010年から

は近畿だけではなく、四国・中国地方に加え、九州の一部の府県なども加えた2府17県でタンポポ調査西日本実行委員会(布谷知夫代表)を組織し、日本の半数近い府県にタンポポ調査が広がった。

### タンポポ調査の成果と今後の課題

外来種と在来種の分布状況の変化を明らかにして、各地の環境変化を記録できたことは大きな成果である。世界的に見ても、特定の種の分布状況を50年も継続して調べている例は少ないと思う。専門家の調査では得られない膨大な数のデータを収集し、それを専門家の指導を受けながら解析を進めるといった市民科学の典型的な取組みとなっている。タンポポ調査を始めた時には、50

年間も継続できるとは思いもしなかった。継続こそが成果の一つであり、この調査に高い関心を持って現地でタンポポを調べる市民と、その解析を行うスタッフの存在が重要である。そして、大阪自然環境保全協会という実施組織が50年間継続してきたことも大きい。それに加えて、外来種タンポポが増加する一方ではなく、在来種の復活が生じたり、雑種の出現があったり、農地環境の変化で外来種が侵入したりと予期せぬできごとが相つぎ、やめられなくなった点があげられる。調査スタッフの高齢化で、調査が実施できない府県が増加している現状があるが、調査方法を改善することで可能な限り継続していけたらと思っている。(文中の所属は当時)

## 里山一斉調査

文・写真 常俊 容子(NOB)

### 始まりは…

1983(昭和58)年に「里山動物調査」として副会長の木下陸男さんを中心に市民が調査員となってスタートしました。その背景として、1976(昭和51)年「郷土における自然環境の保全と回復」を目的に保全協会が設立された当時、箕面のサル問題、北摂のシカ問題に関わる中で、1978年に開講した「ナチュラリスト講座」は(故)朝日稔さん、恩地実さん(現講師)、村上興生さんなど野生哺乳動物の研究者たちを講師陣に、フィールドは主として北摂。そこで野生鹿を里山の重要

な指標という位置付けで「生きものの生息空間としての里山が荒廃している?!」現状を市民に啓発するイベントとして講座メンバーの手で始まりました。

今や普通に使われる「里山」のワード。かつてはローカルな用語として研究者が、また林政界限で使われていたものの、広辞苑に掲載されたのは第5版(1998年)。対外的には1979年3月25日「赤旗」誌掲載の木下さん談「農地と山の間にある「里山」は動物が生活する依存度が高く、人間の生活領域とも重なる」が初出とのこと。

1970年代頃より原生自然を守る自然保護運動とは一線と画す、社会文化的な意義も含む価値を認めた二次的自然としての農用林＝「里山」を論じた(故)四手井綱英さんとは協会主催の里山シンポジウムにお招きするなど、交流が続きます。その後「里地里山」「里やま」「SATOYAMA」などのワードが派生、解釈はあれよあれよと拡大し氾濫。

さて、木下さんは第一回調査の報告で「今回の調査で、私たちは大阪周辺の雑木林を中心とした山の姿を“里山”と呼んだのですが、本

来“里山”ということばは、“奥山”に対して、人里近くで利用される森林を総称しているわけです。私たちはあえてそれを拡大解釈し、大阪府民の“ふる里の山”、都市“大阪”と自然が共存する将来像を描く山ということで“里山”という言葉を用いました」と述べ、さらにNOB（ナチュラリスト講座OB）が当イベントに取り組む経緯については「府下に広がる山々をかけ回っておりましたところ、生息する野生動物というのが一般に“里山”といわれる非常に身近な低山帯に主に生息していることが体験的にわかり、そのような場所を守ることが、実は生息場所の確保ということで野生動物の保護にもつながるということに目が向いたわけです。そしてその里山とはどのような場所なんだろう、ということから出発したのが里山保全運動だったわけです」（里山シンポジウム1986）と述べています。

当時はバブル前夜でもあり、ダムやゴルフ場、大規模宅地や道路などの開発で生き物の生息空間自体が消失、または大きく改変され、その一方で放棄林、放棄耕作地の増加にも注目しました。生物多様性国家戦略が1995年策定され、第6次（2023年）で大きく取り上げられた生物多様性の劣化、変化の一因、人の関与の減退「アンダーユース」にもいち早く警鐘を鳴らしていたともいえます。また「生物多様性保全上重要な里地里山」（重要里地里山）の大阪府22箇所（全国500箇所、環境省2012）と重なる地点も多いのも確信的でした。

## 現在…

事務局はNOB（里山委員会旧メンバー）が担当し、地域の観察会グループなどの担当・協力・共催を得て実施しており、堺・鉢ヶ峯コースが参加したタイミングで「里山一斉調査」と改称。橋本・玉川峡ダム開発反対運動への協力や、地域の活動支援などでコースは増え、今年は新たに河内長野が加わり、大阪府内14コース、和歌山県1コースを予定しています。

毎年同時期、同地点で、ヒトの道をちょっと外れてウォーキング。ほんの1日ではありますが、自然の変化を体感し、課題を緩やかに共有できればという思いで取り組んでいます。

## 野生哺乳動物調査あれこれ

「当初、協会で野生哺乳動物に興味がある人が各々自分なりのデータを集めていました。それを小さな勉強会で話をしていました。…発表まではいきませんでした。全て、アマ

チュア中心で！」（池田裕計さん談）

鹿糞塊調査（受託事業）や哺乳動物相調査（カメラトラップ）など、大阪府のモニタリング調査（大阪府立環境農林水産総合研究所・生物多様性センター）に協力、この一部は現行のモニタリング体制以前より独自に実施していたものです。

また奈良公園の鹿調査に協力しており、主宰の立澤史郎さん（北海道大学・カモシカの会関西西前代表・NOB）は「天然記念物『奈良のシカ』4要件の現状と課題 -支えあう神鹿文化と生態特性-」で今年の「四手井綱英賞」（関西自然保護機構）を授与されました。

その他「キツネプロジェクトin大阪」として2017年より、飛べない野生哺乳動物の重要な移動ルートとして、残存緑地の潜在価値を明らかにすべく、主に北摂都市域での情報を収集しています。この一環で、園内で繁殖が確認された万博記念公園（当初協会受託事業）での調査も継続しています。

当時、社会一般にナチュラリストの言葉も里山と言う単語も殆ど認知されていませんでした。

それをナチュラリスト講座生で、里山に市民権を持たそうと遮二無二、運動していました。

阪急三番街で里山キャンペーンや朝日新聞の拡販用の冊子【よりみちハイク】に一斉調査の7コースと見どころを載せてもらいました。又、国語辞書の発行社に里山を記載するように申し入れたこともありました。

里山については箕面でのシンポジウムの後での雑談で、四手井先生が、「信州の奥山やドイツの山まで里山が独り歩きを شدした！」と言っておられたのが、懐かしく感じます。

（里山動物調査の立ち上げにかかわった池田裕計さんの回想）

## 海関係グループの観察会における市民参加型調査

文 田中 広樹(海の観察会)

海の観察会では、調査のための観察会という発想ではなく、あくまでも教育活動としての観察会を、調査を兼ねた形で実施して、いわば副産物的に調査データを得ようという仕組みにしています。

2008年に大阪湾生き物一斉調査が始まり、堺浜自然観察会では2011年から2019年まで9年間これに参画しました。参加者さんがあまり興味を持たない生き物までリストアップするのはたいへんでしたが、新規に造成された人工干潟に次第に生物が増え、年月とともに変化していく様子、必ずしも元の自然の状態に戻っていくわけではないことを目の当たりにできたことはとても興味深かったです。その近隣の堺浜自然再生ふれあいビーチでも2015年から一斉調査に参画していましたが、ここ数年はお休みしています。一方で、加太の城ヶ崎と兵庫県の成ヶ島での観察会を一斉調査に参画する形で実施はじめています。いつまでも継続できるのが理想ですが、そうでなくても調査結果が公表されていればデータが役立ちますの

で、大阪湾生き物一斉調査のようにきっちりと情報公開していく仕組みはとても大切だと思います。

2015年に開始した微小貝プロジェクトでは、微小貝さがしサポート図鑑というWEBサイトで、一般の方から漂着物の情報を投稿してもらい仕組みをスタートしました。当初200点の画像から始まった図鑑は8年間で1000点を超え、現在では微小貝だけでなく漂着物全般のデータベースとなる「砂浜観察サポート図鑑」に移行されています(2025年公開、登録点数1700以上)。画像投稿型のWEB図鑑は市民参加型調査の側面があり、「チリメンモンスターWEBインタラクティブ図鑑」(2013年公開)とともにWEBを活用した全国的な調査データの収集の仕組みを継続的に運営しています。

大阪湾ウミウシ観察会も、市民参加型調査としての側面を重視しています。ウミウシ類は非常に魅力的でありながら、小さい種類が多い上に生息密度が低いため、とても見つけにくい生き物です。当初はいつごろどんなウミウシが見つかるかわか

らない状態でしたので、毎回新たなウミウシが見つかって盛り上がりながら、ウミウシを見つける技術を身につけたスタッフが少しずつ増えてきました。そこでわかってきたのは、ウミウシ類はスタッフだけで探すより、多くの参加者さんと一緒に探したほうがたくさんの種類が見つかるということで、まさに市民参加の力を大いに発揮しています。現在は毎月1回の観察会を開催しており、これまでに約80回の調査データが集まっていますが、2022年までのデータは大阪市立自然史博物館研究報告に掲載され、またOBISという世界レベルの生物データベースにも登録し、世界中のウミウシ研究者に活用されはじめています。調査結果を積み重ねることはとても意義のあることですが、観察会の基本は大阪湾の生き物を素材とした環境教育活動です。ウミウシ観察会も、それに伴う調査も、ウミウシを見つけてという感動体験を原動力に、この先100年、1000回まで継続し、その結果を世界に発信していければと夢見ています。



写真-1 ウミウシ観察会



写真-2 人海戦術

これらの調査の成果は、各サイトでご覧いただけます。以下の2次元コードからご覧下さい。



大阪湾生き物一斉調査・情報公開サイト



砂浜観察サポート図鑑



大阪市立自然史博物館研究報告



JAMSTECによるOBISデータの紹介

# モニ1000里地調査の取組み—コアサイト穂谷を中心に

文・図 木村 進(モニ1000穂谷コーディネーター)

## モニ1000とは？

モニ1000とは「モニタリング1000」の略で、環境省が2003年から全国に1000ヶ所の調査サイトを設け、100年以上モニタリングを継続して、自然環境の変化を把握し、その成果を生物多様性保全につなげることをめざして取り組んでいる事業のことである。生態系の劣化はゆっくりと生じることが多く、それに気づくためには、「長期間、多くの地点で、同じ方法でみる」ことが重要で、それを行うために始まったものである。

そのうちの「モニ1000里地調査」は、日本自然保護協会が受託して、第1期調査が2005年から始まり、5年毎に結果の集約が行われて報告書が発行されている。現在は2023年～2027年の第5期となり、全国でコアサイト18ヶ所、一般サイト185ヶ所で実施されています。大

阪では、表-1に示したように、コアサイト1と一般サイト5で調査が行われている。

## 穂谷におけるモニ1000調査

穂谷地区は2005年の第1期から「各地域の代表的な里地里山を長期的に調査する」コアサイトに指定された。調査員は市民が中心の約30人で、枚方いきもの調査会をはじめ、大阪自然環境保全協会・NACSJ自然観察指導員大阪連絡会・全国カヤネット・大阪産業大学森川たんぼプロジェクトほかのメンバーがボランティアで調査を続けている。

調査は全国一斉に里地調査事務局が定めた方法で行われており、穂谷地区でも表-2に示した8つの項目での調査を2005年の第1期から続けてきて約20年になる。

## 調査結果の概要と今後の課題

ここでは、鳥類・中大型哺乳類・チョウ類の種数や個体数の変化について紹介しておきたい(図-1～2)。鳥類の個体数は減少傾向にあるが、種数は横ばい状態である。中大型哺乳類とチョウ類については、調査開始後2012年までは種類数が横ばいかやや増加していたが、それ以降は減少傾向にあることがわかる。穂谷地区は調査会時時点では美しい棚田が各所に見られたが、次第に放棄されたり、改変されたりして、2012年には水田は一部に残るだけになってしまったことが、生物相の変化にも影響しているものと思われる。2024年から自然再生プロジェクトの取組みが始まり、生物多様性の改善が期待され、今後も可能な限り継続して改善状態をモニタリングしていきたい。

表-1 大阪におけるモニ1000調査サイト(第5期)

市町村	地域	団体	植物相	鳥類	チョウ類	哺乳類	カヤネズミ	カエル	トンボ	植生園	ホタル
枚方市	穂谷の里山	枚方いきもの調査会ほか	●	●	●	●	●	●	●	●	▲
豊中市	千里緑第2地区	鳥熊山の雑木林を守る会	●	●	●	●				●	
池田市	五月山緑地	五月山グリーンエコー	●	●	●						
池田市	余野川周辺用水路	池田・人と自然の会									●
吹田市	紫金山公園	吹田自然観察会	●	●	●						
富田林市	奥の谷	富田林の自然を守る会	●	●							

※鳥自然観察会の植物調査は第4期で終了。また、穂谷の「水環境」調査も第4期で終了。

表-2 穂谷におけるモニ1000調査の調査項目と方法

調査項目	調査対象と調査方法	調査期間・頻度
植物相	調査ルート上の植物(主に草本)の種名を記録	春～秋、月1回
鳥類	調査ルート上の鳥類の種名・個体数を記録	越冬期・繁殖期
中大型哺乳類	3地点に設置した自動撮影カメラで種名・個体数を記録	春～秋、年3回
カヤネズミ	調査区画内のカヤネズミの巣の個数と環境条件を記録	初夏・秋の2回
カエル類	アカガエル類の卵塊数と環境条件を記録	2～3月に数回
チョウ類	調査ルート上のチョウ類の種名・個体数を記録	春～秋、月1回
トンボ類	調査ルート上のトンボ類の種名・個体数を記録	春～秋、月2回
植生園	現存相観植生園を作成し、各植生の凡例面積を記録	数年に1回

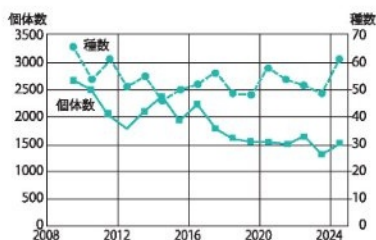


図-1 鳥類の種数と個体数の経年変化

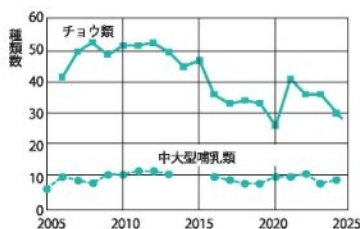


図-2 チョウ類・中大型哺乳類の種数の経年変化

## 草地生態系研究会の活動とカヤネズミ調査

文・写真・図 畠 佐代子(草地生態系研究会、全国カヤネズミ・ネットワーク代表)

保全協会設立50周年お祝い申し上げます。全国カヤネズミ・ネットワークは今年設立25周年、ちょうど保全協会の半分です。まだまだです。私が保全協会の活動で最も深く関わった草地生態系研究会は、2012年に開催された第1回草地生態系保全シンポジウムをきっかけに発足した有志のグループです。2013～2020年の活動期間に、大阪府内と淀川水系周辺の草地生態系の保全に取り組みました。主な取り組みは、第2回・第3回草地生態系保全シンポジウムの開催(2014年・2016年)、草地生態系保全講座の開催(全5回、2014年)、淀川水系桂川河川敷での、カヤネズミの生息地保全(2013～2016年)と草地生態系保全に関わる人材の育成(2015～2016年)、大阪府内カヤネズミ一斉調査(2017年、2019年)です。最も長期にわたった桂川の取り組みでは、河川改修工事後に再生されたオギ原で、データロガーを用いたカヤネズミの生態調査や、オギ原の草刈

り、オギの生育を妨げるツル植物や外来種の除去などを行いました(写真-1)。参加者には、実地での調査保全活動を通じて、草地生態系の知識や調査方法を学んでいただきました。草地生態系研究会の活動に際しては、保全協会会員、草地生態系講座の修了生、地元でカヤネズミ調査を行っている乙訓の自然を守る会の方々など、協会内外の多くの方に参加・ご協力いただきました。改めてお礼申し上げます。活動の成果は「都市と自然」で随時報告してきましたので、よろしければぜひバックナンバーをご覧ください。

カヤネズミは巢作りの際、葉を植物から切り離さずに編むため、営巣場所は草地の質的な変化の影響を受けやすいと考えられます。このことから、里地里山の草地環境の指標種として「モニタリングサイト1000(通称「モニ1000」)里地調査」の調査対象種のひとつに指定されています。枚方市の穂谷は、モニ1000里地の主要な調査地(コアサイト)として、2006年からカヤネズミ調査が行

われています(写真-2)。穂谷のカヤネズミの生息面積(巣が見つかった調査区画の草地の合計面積)は、2006年は3,635㎡でしたが、年々休耕田の遷移が進んで、2022年には2,656㎡に減少しました。調査面積に対する生息地面積の割合も徐々に減少し、近年は全国平均を下回っています(図-1)。2024年度から3年計画で行われている穂谷プロジェクトでは、カヤネズミの生息地を増やすために、モニ1000里地のカヤネズミ調査区画でオギ原を増やす取り組みを行っています。2年目となる2025年は、放棄田に繁茂したガマやセイタカアワダチソウの刈り取りと、ヤナギの根の掘り起こし、オギの株の移植を行いました。放棄田のイノシシの掘り起こしがひどく、残念ながらまだカヤネズミの営巣は確認できていませんが、移植したオギが根を張って群落が徐々に広がってきていますので、来年度は巣が見つかることを期待しています。



写真-1 オギ原保全活動の様子(桂川河川敷、2017年)



写真-2 カヤネズミ調査の様子(枚方市穂谷、2025年)

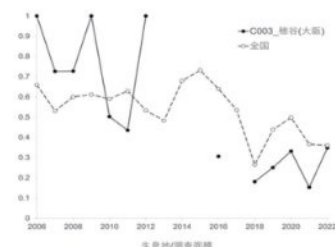


図-1 調査面積に対するカヤネズミの生息地面積の割合。実線は穂谷、点線は全国の調査サイトの平均値。モニ1000里地調査の穂谷カヤネズミ調査結果から畠作成。穂谷での2013～2015年および2017年の調査は行われていない。

# サシバプロジェクトin大阪

文・図 小室 巧(サシバプロジェクトin大阪代表)

## サシバプロジェクトin大阪

### (サシバPJ) 立ち上げの経緯

身近な自然である里山の生物が急速に減少し多様性が失われていく事に危機感を感じ、里山生態系のアンブレラ種であるサシバの生息状況を調査し、生物多様な里山環境の保全に繋がりたいと、2014年に大阪自然環境保全協会（以下当協会）、日本野鳥の会大阪支部、大阪市立自然史博物館他の有志が集まり、当協会の自然保護調査研究部の調査研究グループとして活動を始めました。

## サシバPJのこれまでの活動経過

発足からこれまでの活動経過を下表にまとめました。

### 今後の課題など

2017年サシバ生息詳細調査の10年後となる2027年には「フォローアップ・サシバ生息詳細調査」フォローアップ追跡調査を計画しています。今後はこの詳細調査の財源確保と参加協力者が必要です。サシバPJのメンバーのほとんどは協会会員ではありませんが、他の里山保全活動グループや、コンサルタント会

社、動植物の専門家など幅広く、当協会のこれからの可能性や方向性に繋がるのではと感じています。

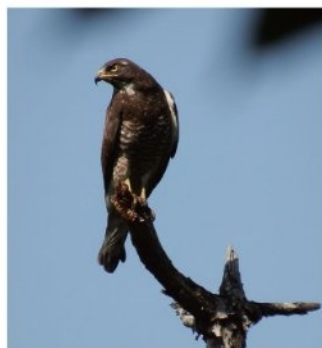


写真 サシバ

表 サシバPJのこれまでの活動経過

2014	9月にサシバプロジェクトin大阪が発足
2015	現地調査・過去資料の収集、大阪バードフェスティバルで「サシバシンポジウム」開催(大阪府のサシバの現状を講演(大西))
2016	現地調査・サシバ目撃情報を募集
2017	現地調査(大阪北部・南東部詳細調査)、11月に自然史フェスティバル参加(以降毎年参加)、大阪鳥類研究グループ総会「大阪府のサシバの現状」「大阪府のサシバの生息環境と繁殖阻害要因」講演(大西)
2018	現地調査、プロジェクトの活動が「バードリサーチ賞」を受賞、自然環境市民大学記念講演「大阪のサシバの生息状況 ～40年前と比較して見ると～」(小室)
2019	現地調査、サシバ調査体験会開始、
2020	コロナ禍のため現地調査中止(～2021年)
2022	サシバ調査オンライン説明会、現地調査、体験学習会、奄美大島サシバ越冬地調査
2023	現地調査、体験学習会(他の里山保全活動グループとコラボ交流も含む)、奄美大島調査
2024	現地調査、体験学習会、奄美大島調査
2025	現地調査、体験学習会、奄美大島調査、10月奄美国際サシバサミットでポスター発表
2027	2017年に実施した詳細調査を実施予定



図 奄美国際サシバサミットでの発表ポスター(2025年10月)